

# 『明日香井集』下巻の雑歌 — 付家集不載歌 —

稲葉美樹

## はじめに

稿者は、飛鳥井雅経の家集『明日香井集』を順次読み進めてきたが、本稿はその最後となる。『明日香井集』の構成を略記すると、上巻には定数歌を収め、下巻には、前半に小規模な歌会・歌合歌を詠作順に配し、後半に四季・恋・雑の部類歌を収める。雑歌一八五首は、旅（歌番号一四八〇～一五六九）・述懐（一五七〇～一五九二）・哀傷（一五九三～一六二五）・祝（一六二六～一六三九）・神祇（一六四〇～一六四六）・釈教（一六四七～一六六一）・隱題（一六六二～一六六三）・折句（一六六四）の順に配され、この後増補かと思われる八首（一六六五～一六七二）が存する。このうち、旅歌は九〇首を占め、実際の旅の詠まれた歌が多いことから、他の小部立と区別して既に検討を終えたので③、本稿では雑歌のうち、旅歌以外の作を検討する（本稿で検討対象とする部分を使宜上「雑歌」と呼ぶこととする）。歌番号一五七〇から一六七二の一〇三首となる。

「雑歌」中に勅撰集入集歌は八首存する。すなわち、一五七八（『新後撰集』一四四五）・一六二六（『統拾遺集』七五七）・一六三六（『新後撰集』七二七）・一六四七（『統拾遺集』一三七〇）・一六五八（『新後撰集』六八九）・一六六〇（『統後撰集』五九九）・一六

六五（『新勅撰集』五六四）・一六七二（『統古今集』一八七七）である。また、『明日香井集』には重出歌が多いが、「雑歌」では、一五七七が八六三（異同がある）と、一五七八が八六・八六四と重複している。

先述の通り、「雑歌」はさらに八つの小部立から成っていると考えられる。このうち、哀傷と祝はすべて非題詠歌、その他は題詠歌が多いなど、和歌の性質が異なるので、①述懐、②哀傷、③祝、④神祇・釈教・隱題・折句・増補かと思われる歌、の四歌群に分けて気づいたことを述べたい。また、雅経には『明日香井集』に不載の作も四五首存する。『明日香井集』を順次読み進める作業をひとまず終了するのに伴い、これらについても整理しておきたい。その上で、これまでの拙稿で言及しなかった『夫木抄』一四九八三歌についても本稿で触れたい。

## 一 述懐

一五七〇～一五九二の二三首。一五七〇～一五八八は題詠で、その後贈答歌二組が収められている。贈答歌は二組とも、人に物を贈る際に添えた歌を雅経が代作したものとそれに対する返歌なので、この小部立は述懐というより狭義の雑歌と呼ぶべきかもしれない。



め、本稿の考察対象から外している。

二六 特に上巻は私家集的な構成が著しいが、中巻にいくにつれて散文表現が増加して随想的になり、下巻は物語的になるとされる。なお、全巻を通して和歌は詠まれている。

二七 柿本奨『蜻蛉日記全注釈』（角川書店 一九六六年）

二八 「初蟬の声」は『大斎院前御集』（二〇八〜一一〇番）と『大斎院御集』（二五・二六番）に見える。

二九 「ホトトギスを待つ女―道綱母の和歌へのこだわり―」（『日記文学研究第三集』新典社 二〇〇九年十月）、『蜻蛉日記』の鶯と郭公―道綱母の心象風景―（『国文目白』四九・二〇一〇年二月）

三〇 井野葉子氏は、女三宮のひぐらしの歌について、「男を待つ女の悲しみ」ではなく、「目の前にいる男が出て行く悲しみ」を詠んでいること、その先例が『蜻蛉日記』の蝸の初声の箇所であることを指摘する。（「女三の宮の「ひぐらし」の歌―刻み付けられた柏木の言葉―」『源氏物語の歌と人物』翰林書房 二〇〇九年所収）

三一 『能宣集』には以下の歌（四二五番）が見える。

五月一日ごろ、松崎といふ所にまかりて、時鳥のおと  
なき心人いひ侍るに

ほととぎすはつねを松がさきにきてきかでかへらむことを  
しぞおもふ

大中臣能宣は、清原元輔とも親交のあった梨壺の五人の一人であり、この歌が清少納言に伝わっていた可能性も考えられる。これも、「なにさき」を「松ヶ崎」と判定する傍証となるだろう。

\*Japanese poetry of “higurashi”, and “matsu” in ancient literature.

—Through the conversation about the famous place of greyheaded cuckoo in The Pillow Book—

\*Etsuko Akama 十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 (Department of Culture and Communication)

キーワード 蝸の歌 松ヶ崎 待つ女 枕草子 平安女流文学

はできる。しかし、蟬ではなく蝸だと言ったのは、「にくき名」すなわち「待つ（ケ崎）」と聞いた女房が、女流文学を中心に浸透していた「蝸」と「待つ」の結びつきを連想したためだと考える。以上の考察の結果、『枕草子』の郭公の名所「なにさき」は、「蝸」と「まつ」との関係からも、間違いなく「松ヶ崎」であったと結論付け、本稿を終えることとする<sup>(11)</sup>。

## 注

- 一 「五月の御精進のほど」における散策ルートを地理的アプローチから考察した論に、片平博文『『枕草子』にみる平安京郊外への道』（『地形環境と歴史景観―自然と人間の地理学』日下雅義編 古今書院二〇〇四年所収）がある。
- 二 引用本文は、『新編日本古典文学全集』（小学館）による。以下、『宇津保物語』『蜻蛉日記』『源氏物語』で引用する本文は、すべて同じシリーズの全集によった。
- 三 『枕草子』「生ひさきなく、まめやかに」の段に、清少納言の宮仕えに対する積極的な意見が述べられており、これを「宮仕え称賛論」と呼ぶ。
- 四 定子後宮の気風については、藤本宗利『枕草子をどうぞ―定子後宮への招待』（新典社 二〇一一年）に詳しい。
- 五 受動的な態度を否定する定子後宮の価値観について考察した論に、山中悠希『『枕草子』「殿などのおはしまさで後」の段における定子の意向―「いほでおもふ」ことの否定―』（『中国文学』九一・二〇一三年五月）がある。
- 六 宋成徳「蟬、ひぐらしを詠む万葉集と中国文学」『京都大学国文学論叢』二十（二〇〇九年二月）
- 七 小林祥次郎「せみ（付）ひぐらし―古典文学歳時記のうち―」（『群馬県立女子大学国研究』二六一一九九六年三月）
- 八 『藝文類聚』の「蟬」の項に、「禮記曰、仲夏之月、蟬始鳴。季夏之月、寒蟬鳴」とある記述を引く。
- 九 前掲注六による。
- 一〇 寺窪健志「夏の夜のひぐらしの声―大伴家持「晚蟬歌」試論―」（『日本文芸論叢』一一・一九九七年三月）で、小島憲之、芳賀紀雄等の論を紹介し、考察している。
- 一一 『万葉集』の用例は『日本古典文学全集』による。
- 一二 『古今集』の用例は、『新編日本古典文学全集』による。なお、その他の歌集は『新編国歌大観』により、適宜漢字表記を当てた。
- 一三 片桐洋一『古今和歌集全注釈』（講談社 一九九八年）
- 一四 「琴の音」と「松風」を取り合わせた勅撰集の和歌には、「琴の音に峰の松風かよふらしいづれのをよりしらべそめけむ」（『拾遺集』雑上・斎宮女御）がある。
- 一五 和歌の用例数に詞書のものには数えない。たとえば『万葉集』で、「蟬を詠む」と題して蝸の歌が記される例があるためである。『古今集』の蟬の用例は、昼に鳴く蟬と夜に燃える螢を対照させた恋の歌の他、「夏衣」を導く語として詠まれる歌が三例、『後撰集』は、蟬の命のはかなさを詠んだ夏の歌である。『蜻蛉日記』には、この他、「なは蟬」（詳細は不明）の例があり、蟬のうち一例は、その「なは蟬」を指す。また『蜻蛉日記』『枕草子』『源氏物語』では、「蟬の羽」を衣や薄い愛情に例えて使用した例を一例ずつ数えている。なお、『空蟬』については用例が多数あるが、実際の蟬を指した例は少ない

つれづれとわが泣き暮らす夏の日をかごとがましき虫の声  
かな

初秋の夕方に突然鳴き出した蝸の声を聞き、庭の撫子の花を見て、光源氏はいつも自分を待っていた紫の上がもういないことを再確認する。鳴き盛っている蝸の声は、最愛の妻を喪った彼の耳には、単に五月蠅い「虫の声」としか響かない。光源氏の絶望的な思いが伝わってくるような場面である。

最後に宇治十帖の例を見よう。宇治の三姉妹のうち、唯一結婚を経験した中の君は、匂宮の子をめ得太く出産し、都の匂宮邸に迎えられた。しかし、その直後、匂宮には親王に相応しい身分の正妻を迎えられる。妻としての自分の立場に悩む中の君が、いっそ蝸が鳴き盛っているもとの山里に帰ってしまいたいと思う場面である。

〔宿木卷・匂宮と六君の婚姻に、中君が憂悶する〕

物思はしき人の御心の中は、よろづに、忍びがたき事のみぞ、多かりける。日ぐらしの鳴く声にも山陰のみ恋しくて、

おほかたに聞かましものを日ぐらしの声うらめしき秋の暮  
かな

ここでも男君を挟んで二人の妻が並び立つという、これまでと同様の物語設定が認められる。この時代に結婚して妻になることは、夫を待つ生活を送ることだった。訪れない夫を待って、一日を暮らし、気がついたら夕暮れになっていたこともあっただろう。今夜も夫は来てくれないのか、妻たちがそんな不安を抱く時に聞こえてきたのが蝸の声だった。平安女流文学において蝸の声で象徴される

のは、一夫多妻制度下で、夫を待つ女の苦悩ということになるのか。

#### まとめ

以上、蝸と「まつ」の関係について、和歌と散文の用例から考察してきた。古代から和歌に詠まれてきた蝸の歌は、漢詩に詠まれた秋の蟬の影響を受けて作られた。秋の物思いを詠む漢詩の常套表現は、平安時代の恋の歌にもなじんでいく。さらに、蝸に「日暗らし」や「日暮らし」が掛けられ、また「夕暮れ」とも連動して、「待つ」状況と結びついた。そして、「待つ女」をテーマとした『蜻蛉日記』と、『源氏物語』の同様な場面に蝸の歌が多く詠まれたと考えられる。ではここで、本稿の冒頭で提起した『枕草子』の問題に戻ることにしてしよう。郭公の声を聞くために出かけた場所が「松ヶ崎」であったことよって展開する女房たちの会話を改めて確認してみよう。

作者があえて、「なにさき」と示したその場所は、定子後宮では非難すべき受動的な行為であった「待つ」の語をもつがゆえに、「にくさ名」とされた。また、それが蝸を連想させたのは、蝸が「まつ」と関連する語だったからである。当時の和歌を代表する勅撰和歌集には、蝸と松とが強く結びついた歌は見当たらない。しかし、蟬と松の取り合わせなら、『宇津保物語』に複数存在し、それらの用例では、『宇津保物語』のテーマである琴の音が松風と蝸の声を結びつけていた。

『枕草子』には、女房たちが『宇津保物語』の登場人物である「仲忠」と「涼」の優劣争いをしている場面があり、この物語が定子後宮で愛読されていたことは明らかである。それを考慮すると、「松（ヶ崎）」と聞いて、女房が「蟬」を思い浮かべたと考えること

第二部の始まりで光源氏が迎えた若く未熟な妻女三宮は、彼女への恋に狂う若者柏木と心ならずも深い関係をもってしまう。そんな裏切りを夢にも思わない源氏が、女三宮と共寝していた時、鯛がいきなり大声で鳴き出した。その声に促されるように、紫の上の許に帰ろうとする源氏に、女三宮が歌を詠みかけた場面である。〇〇。

歌は、鯛の声を聞きながら起きていくなんて、私に泣けというのでしょうか、という内容で、光源氏は歳の離れた妻の言葉を可愛く思っ、返歌する。源氏の歌は、私を待つ他の妻も鯛の声をどんな気持ちで聞いているだろう、あちらこちらの人の心を乱す鯛の声だというものだった。ここでは鯛と「待つ」がしっかり結びつき、光源氏をめぐって、紫の上と女三宮の二人の妻が、それぞれ相手のところにいる夫を待つ状況が詠われている。

同様に、一人の男を待つ二人の女の状況が語られる場面は、鯛が登場する他の場面にも認められる。次は、幼馴染の妻雲居雁との結婚生活も倦怠期に入った頃、夕霧が親友の未亡人落葉宮に恋慕するようになった時の場面である。

〔夕霧卷・夕霧が小野の落葉宮を訪問する〕

日入り方になり行くに、空の気色も、あはれに霧わたりて、山  
のかげは、小暗き心ちするに、ひぐらし鳴きしきりて、垣ほに  
生ふる撫子のうち靡ける色も、をかしう見ゆ。

〔夕霧卷・夕霧が雲井雁に文を隠される〕

「その文よ。いづら」とのたまへど、とみにもひき出で給はぬ  
程に、なほ、物語など聞えて、しばし臥し給へる程に、暮れに

けり。ひぐらしの声におどろきて、「山の蔭、いかに霧ふたがり  
ぬらん。あさましや。今日、この御返事をだに」と、いとほし  
うて：

小野の山里にひっそりと暮らす落葉宮の家では、鯛がしきりに鳴いていた。文中の「山のかげ」は、『古今集』二〇四番歌「ひぐらしの鳴きつるなへに日はくれぬと思へば山の蔭にぞありける」の引用である。「垣ほに生ふる撫子」は、同じく『古今集』六九五番歌「あな恋し今も見けるか山がつの垣ほに咲ける大和なでしこ」により、ここでは落葉宮に懸想する夕霧の勝手な妄想が描かれている。

夕霧卷の二例目では、帰宅した夕霧が、小野から届けられた落葉宮の母の手紙を雲居雁に奪われ、隠されてしまう。夕霧は内心の焦りを感じながらも平静を装い、妻を宥めようとしているうちに日が暮れ、鯛の声を聞くという展開である。ここに引かれるのも『古今集』二〇四番歌で、「山の蔭」は、先の例と重ねて、小野の山里に暮らす落葉宮を指していることになる。

『古今集』で、鯛は「日暗し」だから日が暮れたと思ったら山の陰に入っていたと戯れていた歌を、『源氏物語』は山陰で待つ女の歌に転換して使用した。鯛と「待つ」の結びつきを意識して『古今集』で使用されている複数の意味を積極的に利用したと考えられる。

次は、紫の上を喪った源氏が一人寂しく過ごしている場面である。

〔幻卷・夕映えに、源氏が一人で思い出にふける〕

つくづくとおはする程に、日も暮れにけり。ひぐらしの声、は  
なやかなるに、お前の撫子の夕ばえを、ひとり見給へば、げに  
こそ、かひなかりける。

ふりがたくあはれと見つつゆきすぎて、山口にいたりかかれ  
ば、申の果てばかりになりたり。ひぐらしさかりと鳴きみち  
たり。聞けば、かくぞおほえける。

なきかへる声ぞきほひて聞ゆる待ちやしつらん関のひぐ  
らし

とのみいへる。人にはいはず。

〔中巻 天禄元年六月〕

ここで道綱母は、自然豊かな土地で鳴き盛っている蝸の声を聞  
く。そして、蝸も自分の訪れを待っていたのかと詠む。道綱母の嘆  
きと共鳴するように鳴く蝸が、彼女と同様、誰かを待っていたと思  
うのである。そこには、『古今集』で呈出された、蝸と「待つ女」を  
結ぶ表現が使われている。しかし、この詠歌は兼家に送られなかつ  
た。それは、もう夫に和歌を送っても無駄だと思ったからだろう。

案の定、唐崎祓いの効き目もなく、状況は悪くなる一方で、兼家  
の前渡りに耐え切れなくなった道綱母は、翌年、ついに家を出て山  
寺に籠もってしまった。そして、もう兼家の来訪を待って心を乱す必  
要のなくなった山寺で、作者は蝸の声を聞く。

かくてあるは、いと心やすかりけるを、ただ涙もろなるこそ、  
いと苦しかりけれ。ゆふぐれの入相のこゑ、ひぐらしの音、め  
ぐりの小寺のちひさき鐘ども、我も我もとうちたたきならし：

〔中巻 天禄二年六月〕

耐え難い苦悩の日々を経た後、道綱母は兼家に自らの思いを訴え  
ることを止め、無言の行動に出た。かつて蝸の歌で兼家の足を留

め、また蝸に自分を重ねて独詠した彼女が、今はもう歌も詠まず、  
夕暮れの寺々の鐘の音に混じる蝸の声を、涙をためて聞いている場  
面である。

『蜻蛉日記』の中で、道綱母が兼家との贈答歌による交渉を諦め  
ていく過程について考察したことがあるが<sup>二七</sup>、三箇所の蝸の用例  
の変化もその過程と合致している。蝸の歌を兼家に送ることを止  
め、さらに詠むことさえ止めたのは、蝸に付随する「待つ女」の立  
場を作者が放棄していったことの表れだったと考える。

### 三、『源氏物語』の蝸

物語中に八〇〇首近くの和歌を含む『源氏物語』に、蝸はどのよ  
うに扱われているのだろうか。蝸と「待つ」との関係は、『源氏物  
語』にも認められるのか、これまで見てきた和歌の用例を思い浮か  
べながら見ていきたい。用例数は全八例、光源氏の物語後半の「若  
菜上」「夕霧」「幻」と、宇治十帖の「宿木」の各巻に蝸が見える。  
順を追って見ていこう。

〔若菜下巻・女三宮の密事発覚の直前〕

すこし大殿籠り入りにけるに、ひぐらしのはなやかに鳴く  
に、おどろき給ひて、「さらば道たどたどしからぬ程に」とて、  
御衣など、たてまつりなほす。：

夕露に袖ぬらせとや日ぐらしの鳴を聞くおきて行くらん  
かたなりなる御心にまかせて、いひ出で給へるも、らうたけれ  
ば、：

待つ里もいかが聞くらんかたがたに心騒がすひぐらしの声

## 二、『蜻蛉日記』の蝸詠

女流文学の嚆矢とされる『蜻蛉日記』は、歌人でもある道綱母が、私歌集の体裁を踏襲しながら書き進めていった作品である<sup>(一六)</sup>。執筆に際して、作者が『古今集』の歌を多く引用し、またその表現を学んでいたことは既に指摘されており<sup>(一七)</sup>、そのことは蝸の歌でも顕著に認められる。

まず、新婚早々に夫兼家の愛人騒動が発覚し、それが落着いた後の描写に、『古今集』の歌と重なる場面が見える。道綱母の心に大きな衝撃を与えたこの事件は、一夫多妻婚制度下に生きる妻の苦悩の始まりだった。愛人の一件が終わっても、兼家の訪問は以前と変わらず、道綱母のもとにはたまにしか訪れない。不満な気持ちを抱えたままの道綱母の傍らには、言葉を話し始めたばかりの息子がいる情景である。

されど、ここには例のほどにぞ通ふめれば、ともすれば心づきなうのみ思ふほどに、ここのなる人、片言などするほどになりてぞある。出づとては、かならず「いま来むよ」と言ふも、聞きもたりてまねびありく。  
〔上巻 天徳元年十月〕

道綱は、父親が帰り際に言い置いていった言葉を覚えて、意味も分からないままに「今来むよ(またすぐ来るよ)」と真似して歩き回っている。兼家のいない家の中で、そのあどけない声を聞きながら日々を過ごす道綱母の心境はいかがだったろう。「今こむ」と言つて去つた男を待ち続けて思い悩んでいる状況は、『古今集』七七一番歌「今こむといひて別れし朝より思ひくらしの音をのみぞなく」と重な

る。というより、この『古今集』の歌を意識して、作者は当該場面を書いたと考えていいのではないだろうか。日記の季節は十月で、蝸の季節をとうに過ぎてはいるが、七七一番歌の「ひぐらし」も掛詞で実態のない例であるから、引用しやすかつたと推測される。

次に、実際の蝸の声を詠った最初の例を見てみよう。

春うちすぎて、夏ごろ、宿直がちなるこちするに、つとめて、一日ありて、暮るればまゐりなどするをあやしう、と思ふに、ひぐらしの初声きこえたり。いとあはれと驚かされて、あやしくも夜のゆくへをしらぬかなけふひぐらしのこゑはきけども

と言ふに、いでがたかりけんかし。  
〔上巻 康保元年夏〕

「ひぐらしの初声」は、鶯や郭公の初声に習った歌語的表現だと思われるが、愚見の及ぶ範囲では『蜻蛉日記』以外に用例を見ない<sup>(一八)</sup>。この蝸は、秋の夕暮れならぬ夏の明け方に鳴いたもので、道綱母が蝸は秋のものという、『古今集』以降の和歌的季節意識でとらえていたことを示している。和歌は蝸を兼家にたとえ、昼間に訪れても、夜にはどこかに出かけることを不審に思つてなじる内容である。この歌を聞いた兼家は出かけるのをやめて、この日は道綱母のもとに留まった。和歌が夫を引き止める効力を発したのである。

しかし、中巻になると、兼家の足は次第に道綱母の家から遠のいていき、道綱母は子宝祈願等の願懸けのため、度々、物詣でに出かけるようになる。琵琶湖のほとりの唐崎に出かけた時のことだった。



かくて東宮より、

恨みつつむなしくならばわれさへや庭去らず鳴く蟬となる

べき

あて宮、

松に鳴く蟬としならば雲の上のしりへのくらゐ何にかはせむ

東宮の歌は『太平御覧』に載る中国の故事を踏まえたもので、齊王の后が王を恨んで死んだ後、蟬に変身したという話によっている。原典で蟬が登って鳴いたのは「庭樹」だったが、あて宮の返歌では、それを松の木に特定している。これを見ると、蟬は松に鳴くものと了解されていたようである。

『宇津保物語』では、どうして蟬が松の木に鳴いているのかを考えてみよう。古代の和歌集に見える数少ない用例で、蟬と共に多く詠まれるのは「松風」であり、松の木そのものではない。また、『宇津保物語』の蟬の和歌には、この物語のテーマになっている琴が多く詠まれている。日本では、はやく「寛平御時后宮歌合」（八八九〇、八九三年）に、「琴の音にひびきかよへる松風はしらべても鳴く蟬の声かな」が詠われていた。すなわち蟬の声は、琴の音や松風の音と似通っている音として詠まれるのであり、もともと蟬と松の木に直接的な結びつきはなかったと考えられる<sup>(二四)</sup>。

一方、松には「待つ」の意を掛けた用法がある。『大和物語』二四段には、醍醐天皇の女御が宮廷で天皇に待ちぼうけをくわされて詠んだという次の和歌が採られている。

ひぐらしに君まつ山のほととぎすとはぬ時にぞ声をしまぬ

「ひぐらし」に「蝸」と「日暮らし」（一日中）を、「まつ」に「待つ」と「松（山）」を掛けた歌である。先行する歌として、「是貞親王家歌合」（八九三年以前）に、「秋の夜にたれを待つとかひぐらしのゆふぐれごとに鳴きまさるらん」がある。「待つ」との関連で、蝸に「日暮らし」と「夕暮れ」が響き合っている。平安時代の和歌において、蝸から直接連想されるのは、「松」より「待つ」ではなかったであろうか。蝸は、「夕暮れ」「日暮らし」「恋の物思い」を介して、「待つ」と結びつき、女流作家が台頭した平安時代中期に、「待つ」女を連想する語として認識されるようになったのではないかと考える。

以下、蝸と「待つ女」の結びつきに着目し、散文における蝸の用例を、比較的用例数の多い『蜻蛉日記』と『源氏物語』から検討していききたい。次に、『源氏物語』以前の作品における蝸と蟬の用例数を一覧表として掲げておく<sup>(二五)</sup>。

(作品中の蝸と蟬の用例数)

作品名	蝸	蟬
万葉集	9	1
古今集	4	4
後撰集	7	1
伊勢物語	1	0
大和物語	1	0
宇津保物語	3	9
蜻蛉日記	5	2
枕草子	2	1
源氏物語	8	2

つ女の思いが合わさって、恋の終わりの未練を詠む歌となつてゐる。さらに「待つ」との関連から、蛸に「日暮らし（一日中）」の意味を重ねることも可能だろう。蛸と「待つ」とのつながりが呈出された歌である。

『古今集』では蛸の歌が秋巻に収められることによつて、蛸は秋のものとして規定されている。それが「夕暮れ」と結びついて、「秋の夕暮れ」に鳴く蛸の情景が生まれ、さらに蛸によつて誘発される物思いに女性側の恋の思いが重なつて、待つ女のイメージが生成されていることが伺える。もう少し時代が下るとどうなつていくだろうか。次に『後撰集』の蛸詠七首を見てみよう。

- 二五三 秋風の草葉そよぎて吹くなへにほのかにしつるひぐらしの  
声
- 二五四 ひぐらしの声聞く山の近けれや鳴きつるなへに入り日さ  
すらん
- 二五五 ひぐらしの声聞くからに松虫の名にのみ人を思ふころか  
な
- 二五六 心有て鳴きもしつるかひぐらしのいづれも物のあきてう  
ければ
- 四二〇 ひぐらしの声もいとなく聞こゆるは秋の夕暮になればな  
りけり  
「日暗し」といふ事なん待ける
- 一一二七 み山より響き聞こゆるひぐらしの声を恋ひしみ今も消ぬ  
べし  
返し
- 一一二八 ひぐらしの声を恋しみ消ぬべくはみ山とほりにはやも来

ねかし

このうち二五三番から四二〇番までの五首が秋巻に、一一二七番と一一二八番の贈答二首は雑巻に収められている。秋の夕暮れと蛸の結びつきは定着し、「ひぐらし」と山陰を洒落た『古今集』二〇四番歌の影響が、二五四番歌と雑の部の贈答歌に強く表われている。その中で本稿が注目したいのは、二五五番歌である。蛸の声を聞く、松虫の名にばかり人を思うとは、蛸の声が秋の訪れを告げたから、本格的な秋に鳴く松虫を連想し、人を待つ思いばかりが強くなると解せようか。さらにそれだけでなく、松と蛸にも何らかの関係があることを示しているのだろうか。

そこで、十一世紀初め頃までの歌集の中で、松と蛸の取り合わせが詠まれた和歌を探してみた。先に掲げた『万葉集』三六五番歌の「山松影にひぐらし鳴きぬ」の他には、『後撰集』の前掲歌と『実方集』に一首ずつ「松虫」と共に詠まれているが、用例は非常に少ない。他には、『大和物語』に「松山」とともに一首が詠まれるくらいだった。

これを松と蟬の取り合わせにひろげてみると、やはり歌集の用例は少ないが、『宇津保物語』に五例もの用例が見つけられる。具体的に見てみると、「春日詣」巻では、源正頼が催した歌会で仲頼が選んだ歌題の中に、「松の蟬」という題があり、「松風の声にくらぶる琴の音を巢なるる蟬は調べざらめや」という歌が詠まれている。また、「吹上下」巻で、演奏会後の帝と正頼の贈答歌に、琴にちなんだ蛸の歌が、それぞれ「松ヶ枝」「松風」と共に詠まれている。残る一例は「菊の宴」巻で、東宮とあて宮の次の贈答歌である。

なく

蝸を詠む

二一五七 夕影に來鳴くひぐらしここだくも日ごとに聞けど飽かぬ

声かも

風を詠む

二二三一 萩の花咲きたる野辺にひぐらしの鳴くなるなへに秋の風

吹く

三五八九 夕さればひぐらし來鳴く生駒山越えてそ我が来る妹が目

を欲り

右の一首、秦間満(はだのはしまろ)

三六二〇 恋繁み慰めかねてひぐらしの鳴く鳥陰にいほりするかも

三六五五 今よりは秋付きぬらしあしひきの山松陰にひぐらし鳴き

ぬ

三九五二 ひぐらしの鳴きぬる時はをみなへし咲きたる野辺を行き

つつ見べし

右の一首大原高安真人の作、年月審らかならず。た

だし、聞きし時のまにまに、ここに記載す。

このうち最初の二首が夏雑歌、次の一九八二番歌が夏相聞、二一五七番歌から二首が秋雑歌で、三五八九番歌以下の三首が夏の六月の詠歌、最後の一首は詠歌時不明となっている。大伴家持の一四七九番歌と、一九六四、一九八二、三六二〇の歌では、憂いや恋の物思いに沈む作者が、蝸の声によって気持ち揺さぶられる状況を詠む。これらすべてが夏の歌で、漢詩と季節が異なるが、蝸に物思いを託す漢詩の詠み方は踏襲している。また、秋の到来とともに蝸を詠む二二三一、三六五五、三九五一番歌は、秋の蝸を詠う点では漢

詩と共通しているが、憂愁の思いはあまり感じられない。

二一五七、三五八九番歌は、夕方になると鳴く蝸を詠う。これは、「ひぐらし(日暗し)」の名に日暮を響かせる日本的な歌い方であるといえよう。物思い、秋の到来、夕暮れ時、それらを誘発する素材として蝸を詠む『万葉集』の詠み方は、蝸の歌の定番として、以後の和歌に受け継がれていった。

平安時代になると、『古今集』が様々な技巧を駆使した観念的で繊細な歌風を掲げ、蝸の和歌についても新たな表現が加わっていく。次に『古今集』の蝸詠を見てみよう(三三〇)。

二〇四 ひぐらしの鳴きつるなへに日はくれぬと思へば山の蔭にぞ

ありける

二〇五 ひぐらしの鳴く山里の夕暮れは風より外にとふ人もなし

七七二 今こむといひて別れし朝より思ひぐらしの音のみぞなく

七七二 来めやとは思ふものからひぐらしの鳴く夕暮は立ち待たれ

つつ

二〇〇番台の二首は秋上巻に、七〇〇番台の二首は恋五巻に採られた歌である。二〇四番歌は、蝸に「日暗し」を掛け、蝸が鳴くと同時に日が暮れてしまったと思つたら、山影に入つていたという洒落である。旅の途上で詠まれた古歌ではないかと考えられてい(三三〇)。二〇五番歌では、夕暮れの蝸の声に山里が結びついて、誰も訪れる人のいない寂しさを詠む。小町集に採られたこの歌を、待つ女の立場から強調して詠むと、恋の歌になるだろう。

七七一番歌では、「思ひ暮らし」に「ひぐらし」を掛け、待つ女と蝸の鳴き声を共鳴させている。七七二番歌では、蝸と夕暮れ時に待

一貫して外向的な後宮の雰囲気を持していたことは注目に値する<sup>(四)</sup>。そんな主人の後宮では、清少納言をはじめ女房たちの間で、「待つ」に対する否定的イメージが形成されていたと考えられる<sup>(五)</sup>。「松」すなわち「待つ」の語を持つ「松ヶ崎」を、「にくき名」としたのも頷けるのである。

第二点目は、その「まつがさき」から、女房の一人が蛸を連想している理由についてである。こちらの方は、定子後宮に特有の認識というより、蛸が「まつ」と結びつく言葉であるという認識が、平安中期の後宮社会に浸透していたことを示しているのではないだろうか。本稿では、この何気ない女房の一言に注目し、古代文学における蛸と「まつ」との結びつきについて考察していく。それは、郭公の名所を「松ヶ崎」と判定する根拠の一つを検証することにもなる。

## 一、漢詩の蟬と和歌の蛸

まず、古代文学における蛸の用例を韻文から見ている。現存最古の和歌集である『万葉集』に蟬の和歌は合計十首あり、そのうち九首が蛸を詠んだ歌になっている。なぜ蛸なのかは一先ずおいて、蟬が和歌に多く詠まれたのは、漢詩の影響によるといえる<sup>(六)</sup>。

蟬は古来、中国で漢詩文の素材として多く扱われてきた。それが日本漢詩に受容され、『懐風藻』でも八編の詩に蟬が取り上げられている。漢詩に詠われる蟬と和歌に詠まれる蟬を比較すると、その大きな違いは蟬の鳴く季節にある<sup>(七)</sup>。漢詩の蟬が秋のものであるのに対して、和歌の蟬は夏のものとして認識されていた。その理由について、宋成徳氏は、『礼記』の記述<sup>(八)</sup>からも、中国の蟬も日本の蟬

と同じように夏から鳴き始め、それが一番盛んに鳴くのが夏であることが推測される。……しかし、中国文学で、ひたすらに秋の蟬が詠まれるのは、根本的に言えば、詩人達が、専ら秋の思いを詠むことによる。」と指摘する<sup>(九)</sup>。

また、漢詩の蟬には「晚蟬」「寒蟬」という表記がしばしば用いられており、それらと、『万葉集』で大伴家持が詠んだ「晚蟬歌」(一四七九番歌)との関係について、議論が紛糾している<sup>(一〇)</sup>。家持の「晚蟬歌」は漢詩の題詠に学んだと考えられるが、夏の雑に入っており、和歌に詠まれているのは蛸なのである。蛸は、夏の末から初秋にかけて、他の蟬達の声が弱まる頃に、ひととき印象的な声で鳴く蟬である。そんな蛸の声を聞いた日本人が、これこそ漢詩人が思いを託して詠った蟬だと見なすのは、極めて自然なことと思われる。古代中国で鳴いていた秋の蟬が、古代日本の蛸と同じ種類の蟬だったかどうかはわからない。しかし、万葉人は漢詩に蟬詠を学び、自らの思いを託すのにふさわしい声の蟬を蛸と判断し、和歌に詠んだのである。

では、『万葉集』の蛸の歌を具体的に見てみよう<sup>(一一)</sup>。

### 大伴家持の晚蟬の歌一首

一四七九 隠りのみ居ればいぶせみ慰むと出で立ち聞けば来鳴くひぐらし

### 蟬を詠む

一九六四 黙もあらむ時も鳴かなむひぐらしの物思ふ時に鳴きつともとな

### 蟬に寄する

一九八二 ひぐらしは時と鳴けども片恋ひにたわやめ我は時わかず